

オホーツク文化の生業カレンダーを作る

高橋 健*

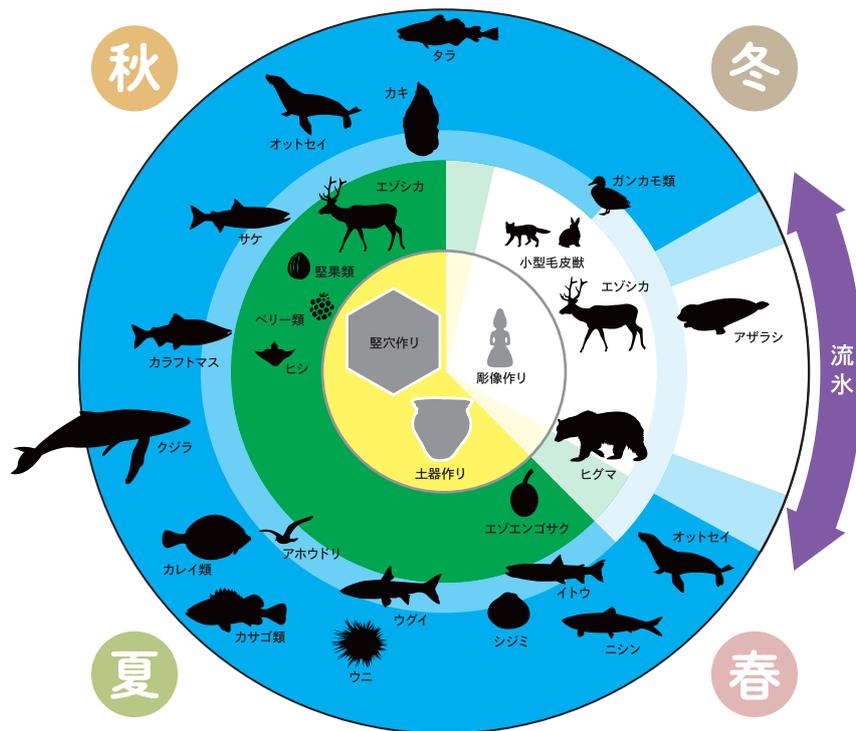
1. はじめに

横浜ユーラシア文化館では、2021年秋に特別展『オホーツク文化—あなたの知らない古代』を開催した（2021年10月16日～12月26日、東京大学大学院人文社会系研究科・同附属北海文化研究常呂実習施設と共催、大阪府立近つ飛鳥博物館に巡回）。この展示にあたって、「道東部オホーツク文化の生業カレンダー」を作成した（図1）。展示パネルや図録ではその意図や根拠について十分に説明できなかったもので、本稿で補足を行いたい。

2. 縄文カレンダー

オホーツクカレンダーは、いうまでもなく小林達雄の縄文カレンダーから着想を得ている。この縄文カレンダーは1975年に発表されたもので⁽¹⁾（図2a）、食料獲得を中心とする縄文人の活動のスケジュールを示している。その特徴としては次のような点が挙げられる。

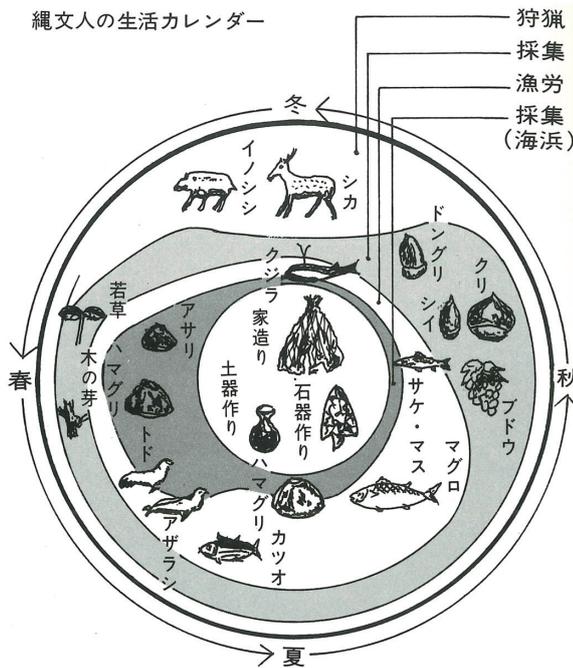
- ① 動植物や活動をイラストで示す。
- ② 円形で、回転方向の角度で季節を示す（反時計回り、春を左に配置）。



（横浜ユーラシア文化館他 2021 『オホーツク文化—あなたの知らない古代』 図 22-1 を一部改変）

図 1 道東部オホーツク文化の生業カレンダー

*TAKAHASHI Ken 横浜ユーラシア文化館主任学芸員



a. オリジナルの「縄文カレンダー」
(小林達雄 1975a 「縄文人の四季」『縄文人展』)



b. 改訂版の「縄文カレンダー」
(小林達雄 1996 『縄文人の世界』)

図2 小林達雄による縄文カレンダー

③ 放射方向の位置（中心からの距離）で生業の区分を示す。内側から採集（海浜）、漁労、採集、狩猟の順に配置。

④ 集落での活動（家造り、土器作り、石器作り）を中心に置く。

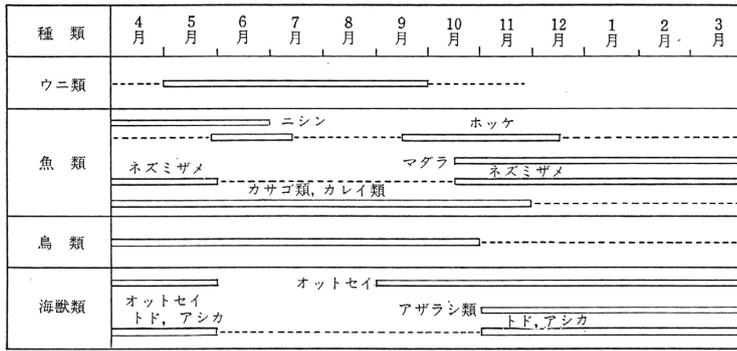
①・②により、季節に合わせて毎年同じ活動が繰り返されるというサイクルが直感的に示されている。左回りの進行方向はアナログ時計とは逆であるが、その意図は不明である。③の結果、（実際にそのような意図があったのかは不明だが）集落を中心とした活動領域をイメージさせている。④により、食料資源の獲得活動の季節性だけでなく、ほかのあらゆる労働、さらに呪術や儀礼などもカレンダーに組み込まれていることが示されている。

縄文カレンダーは、単に縄文文化では多様な資源を利用していたことを示しているだけでなく、食料獲得活動を中心とした厳密なスケジュール管理が行われていたことを表している⁽²⁾。縄文カレンダー

は、ヴィジュアルの分かりやすさもあって広く普及した。もともとは特定の地域や遺跡を対象としていなかったが、各遺跡の出土遺物や各地の生物相に合わせてアレンジした独自のバージョンも多く作られた。小林自身が1996年に発表した新バージョンでは、イラストがリアルになり動物種が増加しているが、基本的な構成は変わっていない（図2b）（小林1996）。

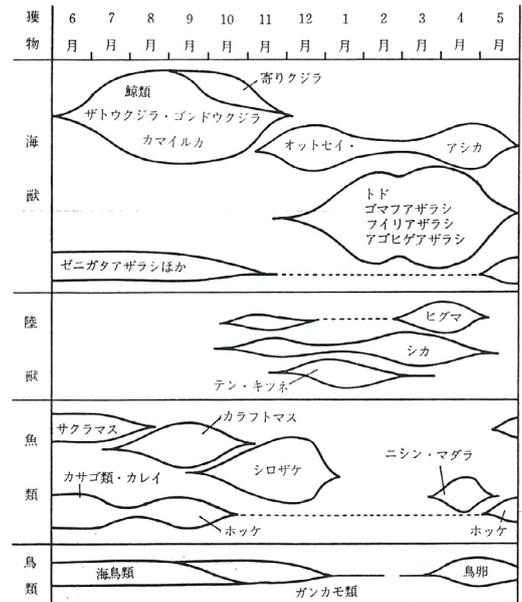
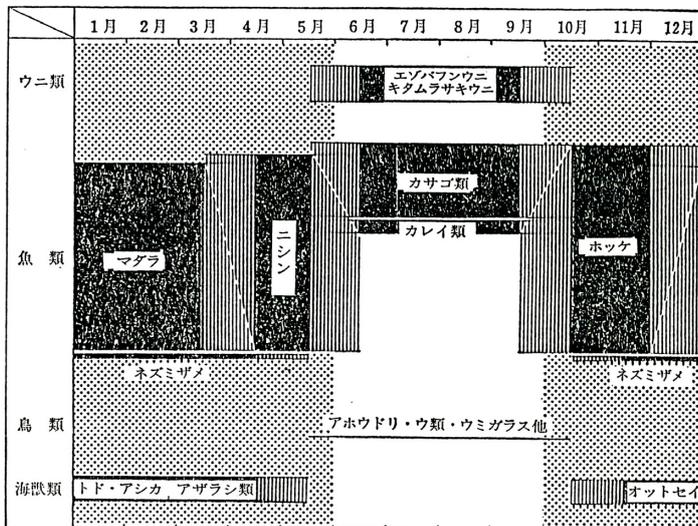
3. オホーツク文化の生業カレンダー

オホーツク文化に関わる生業カレンダーとしては、1978年に西本豊弘が示した香深井1（香深井A）遺跡における主要動物の捕獲シーズンの図が最初のものであろう（図3a）（西本1978）⁽³⁾。魚骨層の詳細な分析結果と現生動物の生態から捕獲された季節を推測し、主要な時期を棒、可能性のある時期を点線で示したものである。図示法における「縄文カレンダー」との相違点としては、① イラストを用いず、



————— 主要な捕獲シーズン
 ----- 捕獲される可能性のある時期

a 香深井 A 遺跡における主要動物の捕獲シーズン
 (西本豊弘 1978 「オホーツク文化の生業について」)



b オホーツク文化の狩猟・漁撈カレンダー
 (大泰司紀之 1983 「北方狩猟民の生活カレンダー」)

c 香深井 A 遺跡における
 オホーツク文化の荷負者達の生業カレンダー
 (大木晴男 1988
 「オホーツク文化の荷負者の生業と集団」)

図3 オホーツク文化の生業カレンダー①

② 長方形で左から右への横方向の時間軸 (4月～3月) で配置し、③ 対象を狩猟漁労に限定し、④ 集落での活動は扱っていない点が挙げられる。

1983年に大泰司紀之は北海道のオホーツク文化の狩猟・漁撈カレンダーを示した(図3b)(大泰司1983)。図示法はやはり長方形の横方向時間軸(6月～5月)であるが、動物(群)を帯状に示してその幅で可食部分の量を表している(この点について明確な説明はない)。内容的には、西本が鯨骨の出土を寄リクジラの利用と解釈して生業としては扱わなかったのに対して、大泰司は夏季に積極的なクジ

ラ猟が行われたとする点が大きく異なる。オホーツク文化全体を対象としているため礼文島には生息しないシカが含まれている点や、脊椎動物に限定している(ウニ類の採集が入っていない)点も異なる。

1988年に大井晴男は香深井1遺跡におけるオホーツク文化の生業カレンダーを発表した(図3c)(大井1988)。長方形の図で横方向時間軸(1月～12月)である。この図は、西本(同前)が示した捕獲可能シーズンに同じ論文で示された可食部分のカロリーを組み合わせ、それぞれの動物種に対応する長方形の面積が生産高(カロリー)に相当するようにした

ものである。

このように1970年代から80年代にかけて、主に研究論文で狩猟漁労に関わる活動の季節性を示す目的のカレンダーが作られていた。1990年代以降になると、博物館での展示を目的としてイラスト付きのカラーの図が作られるようになる。

1991年に開館した北海道立北方民族博物館では、常設展のオホーツク文化のコーナーに「生業カレンダー」が展示されている(図4d)。長方形の縦方向時間軸(1月～12月)で、イラストを加えたものである。内容的には西本の復元した香深井1遺跡における捕獲シーズン(図3a)にもとづいている。

利尻富士町りっぶ館には、利尻富士町役場遺跡の生業スケジュールがパネル展示されている(図4e)。同遺跡の第2次発掘調査後の2011年に設置されたものである。長方形の横方向時間軸(春～冬)で、カラーだがイラストは用いていない。利尻富士町役場遺跡の調査成果によって作成したものである。生業の項目として、海藻類⁽⁴⁾(夏)、クジラ・イルカ類(夏)、陸獣類(家畜のイヌ・ブタは通年、シカ・クマは食用以外の持ち込み)、植物堅果類(山菜は春、木の実・キノコは秋)などが加わっている。

2013年にリニューアルされた網走市モヨロ貝塚の常設展示では、モヨロ貝塚における狩猟・採集カレンダーが展示されている(図4f)。イラストを用いた長方形の縦方向時間軸(春～冬)である。狩猟・採集活動は左から海獣狩猟、漁労、鳥類狩猟、陸獣狩猟、植物採集の順に並び、左右で海／山という場所の区分がされている。クジラが夏とされたほか、山菜や木の実・果実の採集という植物利用が加わっている。

2015年開館の北海道博物館の常設展示オホーツク文化のコーナーでは、香深井1遺跡の調査成果に基づいたオホーツク文化食料カレンダーが展示されている(図4g)。横方向時間軸(春～冬)にイラストを加えたもので、植物質食料は含まれず、動物質食料に絞った図である。香深井1遺跡と比較すると、

陸獣類(キタキツネ・クロテン・ヒグマ、通年)、クジラ(春季)、飼育(イヌ・カラフトブタ、通年)が加わっている。

北海道埋蔵文化財センターが2019年に開催した企画展「もうひとつの古代世界 オホーツク文化」(開催期間2019年7月6日～9月29日)では、オホーツク文化の狩猟・漁労カレンダーが示された(図4h)。長方形で時間軸が横方向の図に、イラストを加えたものである。内容的には、西本(図3a)と大泰司(図3b)を参考にしている。クジラや陸獣類を含んでいるが、植物質食料や家畜は対象としていない。

以上見てきたように従来のオホーツク文化のカレンダーは長方形で横方向時間軸が多く、一部の展示で縦方向時間軸の例があるが、「縄文カレンダー」のような円形の例はなかった。これは西本論文(図3a)の影響が強かったためだろう。対象は動物の捕獲(狩猟漁撈)が多いが、植物採集(e・f)や飼育(e・g)を含めている場合もある。西本・大井はクジラを入れていなかったが(a・c)、近年の展示では入れることが多くなっている(e・f・g・h)。縄文カレンダーのように集落での活動を入れた例はなかった。対象となった遺跡・地域は、香深井1遺跡(a・c・d・g)が最も多く、ほかに利尻富士町役場遺跡(e)モヨロ貝塚(f)、オホーツク文化全般(b・h)の例があった。

4. オホーツクカレンダーの作成

4-1 方針

2021年の特別展ではオホーツク文化全体を扱ったが、第I部「オホーツクの暮らし」は常呂・網走など道東部の遺跡を中心に構成した。このためカレンダーも道東部のデータに基づいたものとした。

縄文カレンダーと同じ円形の配置を採用したが、アナログ時計の回転方向が現代人の感覚になじんでいると考え、進行方向は時計回りとした。春夏秋冬の4つの季節だけを表記したが、作業工程において

は時計の文字盤と同じように1月～12月を配置して位置を決めた。正時の方向をそれぞれの月の1日としたため（真上が12月1日になる）、冬は12月～2月、春は3月～5月、夏は6月～8月、秋は9月～11月となっている。これは北海道埋蔵文化財センター（図4h）の季節区分と一致する。

集落を中心にして食料獲得活動を場所ごとに配置した。内側から野山、河川・湖沼、海である。活動内容による区別はしていないため、採集（野山）と陸獣狩猟、採集（海浜）と漁労・海獣狩猟は、それぞれ同じ同心円上にある。主に時間と手間の問題から、イラストではなくシルエットで表示した⁽⁵⁾。

道東部のモヨロ貝塚（網走市教委2009）とトコロチャシ跡遺跡（東京大学考古学研究室他2012）では比較的最近に史跡整備のための調査が行われ、自然遺物についてのデータも多く得られている。もちろん住居内の骨塚は儀礼的に集積されたものであり、その内容をただちに生業と結びつけることはできない。したがって、特に狩猟の内容については、モヨロ貝塚の貝塚・魚骨層の資料を優先した。刻文期から貼付文期にまたがる時期の資料を含むが、今回のカレンダー作成にあたっては、オホーツク文化の中での時期差は考慮していない。

オホーツク文化期と現代では基本的には動植物の生態に大きな変化は生じていないと考えられるため、アイヌ民族の民族誌や現生の動植物の生態を参考として季節を推定した。

4-2 流水は来たか

現代の道東部では2～3月頃に流水が接岸する。しかし、オホーツク文化期にも流水がやってきたかについては、意見が分かれている。礼文島の香深井1遺跡では分厚い魚骨層が形成されており、ニシンやホッケを対象とした春季の網漁が主要な生業だったと考えられている。もし当時の道東部に流水が接岸していたとすれば、2月～3月には大規模な網漁を行うことはできず、春の漁期が短くなる。このよ

うに流水が接岸したかどうかという問題は、当時の生業を考えるうえで重要である。

右代（1993）は、オホーツク文化の後期（8～9世紀）がグローバルな気候変動の温暖期に相当することや、マガキや二ホンアシカなどの温暖な海にすむ種が出土していることから、流水は接岸しなかったと考えた。これに対して天野（2003b）は、ワモンアザラシやクラカケアザラシなど流水と密接に関連した生態をもつアザラシの骨が出土していることから、オホーツク文化後期にも道東部には流水が接岸したと考えた。

これらのうち二ホンアシカやマガキについては、温暖だったことを示す証拠といえるかどうかについては疑問も残る。しかしそれ以外にも温暖だったとする証拠は見つかっている。モヨロ貝塚10号西貝塚からは、現在の北限が陸奥湾で北海道には生息しないウネナシトマヤガイが出土した。また8号堅穴魚骨層（貼付文期）からはブリ・マグロ類・フグ類など暖流系の種が出土している。グローバルな気候変動との関連からいっても、少なくともオホーツク文化の後半は温暖であったことは間違いなさそうである。近年の観測データをみると平均気温の高低と流水期間の長短には相関関係がみられるので、流水が来なかったか、あるいは流水期間が短かった可能性は高い。

一方、流水が来たとする証拠は主にアザラシの出土である。出土量が最も多いゴマフアザラシは北海道沿岸に定住している個体群もいるため、必ずしも流水の接岸とは結び付けられないかもしれない。しかし、クラカケアザラシやワモンアザラシは流水上で出産や子育てを行い、流水域以外ではほとんどみられない。両種の出土量は決して多くないが、出土しているという事実を重視して、当ても流水は接岸していたと考えた。

1991年～2020年の統計をみると、流水初日の平均は1月26日、終日は3月28日、期間は平均63日となっている。今回のカレンダーでは、2月から

3月にかけての2か月を流水期間と想定した。ただし、温暖期における流水期間の長さについては、検討の余地があるかもしれない。

4-3 食料獲得の季節

食料採集活動の対象となった動植物種について、遺跡出土資料に基づいて採集時期を推定した。動物種のうち魚類と鳥類についてはモヨロ貝塚8号魚骨層（新美・大谷2009、梅田・西本2009）、貝類については10号西貝塚（梅田他2009）を参照した。哺乳類については、これに加えてモヨロ貝塚8号・9号（佐藤2009）、トコロチャシ跡遺跡7号（佐藤2012）の骨塚出土資料も考慮した。

魚類はニシンが圧倒的に多い⁽⁶⁾。春の流氷が消えた後にニシン、夏にカサゴ類やカレイ類、冬にマダラを捕獲したと考えた。ニシンは網漁、それ以外は釣漁であろうか。河川では、春にイトウ、初夏にウグイ、夏にカラフトマス、秋にサケを獲っていた。

貝類については、マガキとヤマトシジミが多い。現在の漁期は、マガキは冬、ヤマトシジミは5月～10月頃である。ウニ層を形成するほどではないが、ウニ殻も出土している。夏に獲られたものだろう。

海獣については、いずれの地点においてもオットセイとアザラシが多かった。オットセイの猟期については、香深井1遺跡で歯の成長線分析が行われた例があるが、道東部ではこのようなデータはない。現在の回遊の時期を参考に、秋に南下する群れと春に北上する群れを対象に狩猟したと考えた。アシカ類は流水を好まないため、流水期間は除いている。オットセイは基本的に陸には近づかないため、沖合での狩猟だろう。アザラシの内訳はゴマフ・アゴヒゲが多いが、ワモン・クラカケも出土している。冬季に流水域で狩猟を行ったのだろう。

展示図録では冬にトドを図示していたが、常呂・網走地域では出土量は少ない。オットセイとは違い、トドやアシカは陸に上がる習性をもつが、オホーツク人はあまり獲らなかったのである。オットセイと

アザラシを重点的に利用するオホーツク文化の特徴を表すため、今回はトドを削除した。

ヒグマについては、トコロチャシ跡遺跡7a号堅穴での110頭の頭骨の集積に代表されるように、骨塚に儀礼的に集積された頭骨の出土が中心である。クマ猟はクマの胆の入手を目的としていたとする説もあり（天野2003a）、食料資源としての評価にはなじまない。しかし狩猟の目的は何であれ、オホーツク人にとってヒグマ猟が重要な活動だったことは間違いないと考えられる。近代のアイヌによるクマ猟を参照すれば、雪の残る早春に穴籠りするクマを対象にして行われたのだろう。

エゾシカについては、やや問題がある。エゾシカはモヨロ貝塚の骨塚からは出土せず、魚骨層や貝塚からも出土量はわずかだったからである。しかし、かつて調査された10号堅穴外側骨塚からは出土している。またトコロチャシ跡遺跡では、7a号骨塚で69頭とヒグマに次ぐ数が出土した。このため骨塚の儀礼に参画する動物種に時期的変化があったとする解釈も提示されている（佐藤2009）。モヨロ貝塚の魚骨層や貝塚からもあまり出土しなかった点は不可解であるが、道東部ではエゾシカはある程度利用されていたろうと考えた。

図録ではエゾシカの猟期を秋としていた。しかし、アイヌは秋の繁殖期のシカ猟も行っていたが、冬が最も盛んだったという（アイヌ文化保存対策協議会編1969）。このため、今回は秋と冬の両方にエゾシカ猟が行われたと考えた。

小型陸獣のうち、キツネ、タヌキ、ウサギ、カワウソ、クロテンなどは良質の毛皮をもつため、小型毛皮獣とした。毛皮の獲得が目的だったとすれば、猟期は冬だと考えられる。

鳥類は、アホウドリとガンカモ類を図示した⁽⁷⁾。いずれも渡り鳥であり、アホウドリは夏季、ガンカモ類は冬季に飛来する。

植物種については、モヨロ貝塚とトコロチャシ跡遺跡の出土資料に限らず、道東オホーツク文化全般

を対象とした(榊田2021・2023)。エゾエンゴサクは、花や莖葉に加えて塊茎が保存食になり、遺跡からも出土例がある。採集時期は、花と同時期だとすれば5月頃だろう。ヒシは9～10月頃に果実が食用になる。ハマナスやヤマグワなどのベリー類が多く出土する点も特徴である。やはり秋に採られたものだろう。堅果類としてはクルミが最も多く、ミズナラやカシワのドングリも出土している。これらの採集時期も秋だと考えられる。

オホーツク文化の遺跡からは、オオムギ、キビ、アワなどの雑穀類も出土するが、その量は多くない。小規模な栽培が行われていたのか、あるいは大陸や擦文文化からの搬入品だったのか、意見が分かれている。國木田による土器付着炭化物の同位体分析によれば、オホーツク文化では雑穀類の利用は低調だったと考えられることから(國木田2021)、カレンダーには示さなかった。

4-4 集落での労働の季節

集落での活動としては、堅穴作り、土器作り、彫像作りの3つを挙げた。オホーツク文化におけるこれらの活動が行われた季節についての具体的な議論は、これまであまり行われてこなかった。必ずしも十分な根拠があるわけではないが、以下のように推定した。

オホーツク文化の大型堅穴住居を建てるのに膨大な労力が必要だったことは間違いない。冬の積雪・凍結期には不可能だから、それ以外の時期となる。壁や屋根にカバノキ属の樹皮を多用しているので、樹皮を剥ぐ季節に建てられたのではないかと考えた。しかし知里(1953)によれば、屋根や壁を葺くウダイカンバの樹皮を剥ぐのは5、6月だが、現地に笹をかぶせて積み重ねておいて使うときに取りに行ったという。このため、樹皮の採取時期から家作りの季節は絞り込めない⁽⁸⁾。冬が来る前には既存の堅穴住居のメンテナンスも必要だろうという点を考慮して、秋としておいた。

オホーツク文化の土器作りについても、屋外での野焼きを考慮すればやはり冬には困難だっただろうが、それ以上絞り込むのは難しい。圧痕レプリカ法によって土器製作の季節を推測できる場合もあるが、オホーツク土器ではそもそも種実圧痕の検出例が少ないため難しい。野焼きに使う薪の伐採は晩秋から冬がよいと思われるが、これも使用するまで保管しておくことができる。やはり決め手を欠くが、秋に家作りを置いた関係で、春～夏と推定した。

彫像製作は季節を問わず可能であるが、エスキモーは長い冬の間にできる屋内作業として、牙製像を彫ることが知られている。オホーツク文化の彫像についても、同様に冬に作られた可能性を考えた。

図示しなかったイベントとして、クマ儀礼がある。オホーツク文化のクマ儀礼が狩猟したクマを対象とするものだけだったとすれば、クマ猟の季節、すなわち春に行われただろう。だが飼育した仔グマを送る儀礼が行われていた場合は話が違ってくる。アイヌのクマ送りの場合は、半年ないし1年半育てたクマを、秋に送る。今回の展示では、首輪と引き縄の表現をもつコロチャシ跡遺跡出土のクマ彫像を根拠に、オホーツク文化でも仔グマ飼育型クマ送り儀礼が行われていたのではないかと考えた。したがって、クマ儀礼の季節としては春と秋の両方の可能性が想定できる。

5 おわりに

2021年の特別展のために作成したオホーツクカレンダーについて、根拠薄弱だった部分や詰め切れなかった部分を含めて対象の取捨選択や季節推定のプロセスを公開した。今後同様のカレンダーを作る場合などの参考にしていただければ幸いである。

謝辞

カレンダーの作成及び本稿の執筆にあたっては、下記の諸氏・諸機関にご教示いただき、資料の掲載についてお世話になりました。

右代啓視、梅田広大、小野哲也、熊木俊朗、榊田朋広、佐々木由香、鈴木三男、中田篤、山谷文人、網走市立郷土博物館、北海道博物館、北海道立北方民族博物館、利尻富士町教育委員会、やなぎ堂（五十音順、敬称略）

註

- (1) 管見の限りでは、縄文カレンダーの初出は1975年4月から小田急百貨店等で開催された朝日新聞社主催「縄文人展」の図録である。各項目の執筆担当は明記されていないが、この「縄文人の四季」の執筆は企画・図録作製に名を連ねている小林達雄で間違いなさだろう（小林1975a）。同年10月刊行の学研の学習図鑑には同じ図がカラーで掲載されており（小林1975b）、作成はこちらが先だったのかもしれない。
- (2) 縄文カレンダーは、弥生時代の稲作開始の前段階に縄文農耕を想定する考えに対するアンチテーゼだったという（小林1977）。今回のオホーツクカレンダーにはそうした意図はないが、狩猟採集民の年間を通じた生業スケジュールを分かりやすく伝えるために作成した。
- (3) 同じ図は3年後に刊行された発掘調査報告書にも掲載されている（大場・大井編1981: 図509）。
- (4) 報告書では、貝類の98%を占めるタマキビ類の多さを海藻採集の間接的な証拠ととらえている（利尻富士町教委2011）。今回作成したカレンダーでは海藻類は取り上げなかったが、モヨロ貝塚10号西貝塚でもタマキビは比較的多かった。
- (5) シルエットはフリー素材を使用した。魚類の一部は北海道立総合研究機構提供の写真（北海道お魚図鑑HP掲載）から作成した。
- (6) 8号魚骨層からはニシンに次ぐ数のイトヨが出土した。想定される漁期は繁殖のために遡上する春から夏だが、報告者が混入の可能性を指摘しているため、カレンダーには含めなかった。
- (7) 8号魚骨層からはカモメやウも多く出土している。これらは通年捕獲可能だったと思われるが、報告者がワシに捕食された可能性を指摘しているため、カレンダーには含めなかった。
- (8) 樹皮の剥ぎ取り時期については、佐々木由香氏、鈴木三男氏、小野哲也氏にご教示いただいた。

引用・参考文献

- アイヌ文化保存対策協議会編 1969 『アイヌ民族誌』、第一法規出版
- 網走市教育委員会編 2009 『史跡モヨロ貝塚』、網走市教育委員会
- 天野哲也 2003a 『クマ祭りの起源』、雄山閣
- 天野哲也 2003b 「オホーツク文化とは何か」『新北海道の古代2 続縄文・オホーツク文化』北海道新聞社
- 右代啓視 1993 「オホーツク文化の拡散と適応の背景」『地方史研究』43(5):53-59
- 梅田広大・米村衛・高橋健・山田訓二 2009 「10号堅穴住居跡西発掘区」網走市教育委員会編『史跡モヨロ貝塚』、pp.289-302
- 大井晴男 1988 「オホーツク文化の荷負者の生業と集団」『考古学論叢』中、斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会、pp.457-485
- 大泰司紀之 1983 「北方狩猟民の生活カレンダー」『考古学ジャーナル』223:15-19
- 大場利夫・大井晴男編 1981 『香深井遺跡』下、東京大学出版会
- 國木田大 2021 「土器付着炭化物から探るオホーツク文化の食生活」横浜ユーラシア文化館他『オホーツク文化—あなたの知らない古代』、p.36
- 小林達雄 1975a 「縄文人の四季」『縄文人展』、p.32、朝日新聞東京本社企画部
- 小林達雄 1975b 「縄文人の生活」『図詳ガッケン・エリア事典』1、学習研究社、pp.16-21
- 小林達雄 1977 「縄文世界の社会と文化」『日本原始美術大系』1、講談社、pp.156-159
- 小林達雄 1996 『縄文人の世界』、朝日新聞出版
- 榊田朋広 2021 「オホーツク文化の野生植物利用」横浜ユーラシア文化館・東京大学常呂実習施設編2021『オホーツク文化—あなたの知らない古代』、p.37
- 榊田朋広 2023 「炭化種実組成からみたオホーツク文化の食用植物利用」『横浜ユーラシア文化館紀要』11:1-20
- 佐藤孝雄 2009 「骨塚から検出された鳥獣遺体」網走市教育委員会編『史跡モヨロ貝塚』、pp.377-412
- 佐藤孝雄 2012 「トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点7号・9号・10号堅穴の脊椎動物遺体」東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設編『トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点』、pp.312-359
- 知里真志保 1953 『分類アイヌ語辞典 植物編』、日本常民文化研究所

東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設編『トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点』、東京大学人文社会系研究科

新美倫子・大谷茂之 2009 「モヨロ貝塚8号住居跡出土の魚類」網走市教育委員会編『史跡モヨロ貝塚』、pp.373-376

西本豊弘 1978 「オホーツク文化の生業について」『物質文化』31:1-12

西本豊弘・梅田広大 2009 「8号竪穴住居跡魚骨層出土の動物遺体について」網走市教育委員会編『史跡モヨロ貝塚』、pp.353-372

北海道埋蔵文化財センター 2019 『もう一つの古代世界—オホーツク文化—』展示解説

横浜ユーラシア文化館・東京大学常呂実習施設 2021 『オホーツク文化—あなたの知らない古代』、横浜ユーラシア文化館・東京大学大学院人文社会系研究科・同附属北海文化研究常呂実習施設・大阪府立近つ飛鳥博物館

利尻富士町教育委員会 2011 『利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書Ⅱ』、利尻富士町教育委員会

図の出典

図1・図2・図3 図中に記載

図4: d 梅田広大氏撮影(2024年)、e 利尻富士町教育委員会提供、f 高橋撮影(2013年)、g 高橋撮影(2021年)、h 北海道埋蔵文化財センター 2019

横浜ユーラシア文化館紀要 第12号

Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 12

2024年3月31日発行

編集 横浜ユーラシア文化館
〒231-0021 横浜市中区日本大通12
Tel.045-663-2424 Fax.045-663-2453
www.eurasia.city.yokohama.jp/
発行 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団
印刷制作 TAKT-JAPAN株式会社

Edited by the Yokohama Museum of EurAsian Cultures
12 Nihon-odori, Naka-ku, Yokohama, Japan
Published by the Yokohama Historical Foundation
Printed in Japan by TAKT-JAPAN, CO., LTD

ISSN 2758-6332